

[31]

氏名	孫 ^{そん} 知 ^し 慧 ^へ
博士の専攻分野の名称	博士(文化交渉学)
学位記番号	東アジア文化博第3号
学位授与の日付	平成26年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	近代日韓仏教の交渉と元暁論
論文審査委員	主査教授 吾妻重二 副査教授 二階堂善弘 副査准教授 篠原啓方

論文内容の要旨

孫知慧氏の論文「近代日韓仏教の交渉と元暁論」は、新羅時代の学僧元暁（617-686）が近代に至ってどのように再評価され表象化されたのかを、当時の日韓仏教界の交渉と韓国仏教界の変化をふまえて考察したものである。内容構成は以下のとおりである。

I 元暁の近代的再生と表象化

- 第1章 民族意識高調期の「英雄化」
- 第2章 仏教界革新期の「改革者像」
- 第3章 日韓仏教思潮交流期の「通仏教実現者像」
- 第4章 戦時護国仏教期の「救国僧像」
- 第5章 総本山建立期における「曹溪宗の宗祖像」

II 近現代における元暁論—「和諍」「通仏教」認識の変化

- 第6章 「和諍」概念の再認識
- 第7章 「通仏教」認識の変化
- 第8章 元暁論に対する省察

結論

付録：鄭暁震「元暁大聖著述一覧表」（1918年）

参考文献

このように本論文は二部に分かれ、「I 元暁の近代的再生と表象化」では元暁の人物像の展開が、「II 近現代における元暁論」では元暁を特徴づける「和諍」・「通仏教」概念に関する展開が論じられる。

第1章「民族意識高調期の「英雄化」」では、1910年代以後、韓国社会における民族意識の高潮とその背景の中で元暁が「民族の英雄」として描き出される過程が検討される。すなわち、史学者張道斌の『偉人元暁』（1917年）や政治家趙素昂の「新羅国元暁大師伝並序」（1933年）、啓蒙雑誌である『開闢』『三千里』の記事などの分析を通して、近代に

おける抑仏解放以後「韓国において仏教とは何か」という探究につれて元暁が再発見されたこと、「韓国民の思想・文化・歴史の独自性」を代弁する英雄として復活したことが跡づけられる。

第2章「仏教界革新期の「改革者像」」では、1910年代以降、韓国仏教界の仏教改革論の盛行につれ進取的「改革者」として浮上した元暁像が考察される。当時、社会進化論の影響、日本留学生の急増、1919年の寺刹令による三十本山の住職たちの専横への反発などにより仏教改革運動が台頭した。そして、その雰囲気の中で結成された「朝鮮仏教青年団」や東京留学生を中心とする「元暁大聖賛仰会」が検討され、元暁が「東方のルター」とされたこと、仏教界の旧習打破、社会救済・革新活動の模範として強調されたことなどが明らかにされる。

第3章「日韓仏教思潮交流期の「通仏教実現者像」」では、近代韓国学界において1930年代以後に提唱された通仏教論と「通仏教の実現者」として宣伝された元暁像が検討される。すなわち、明治維新以後、廃仏毀釈と西洋宗教流入の脅威を経験した日本仏教界では村上専精や高田道見らにより、従来の宗派単位の仏教理解から脱して、歴史的比較的研究を通じて仏教全体を統一的に把握しようとする「通仏教論」が流行したのであったが、これに対し、崔南善の「朝鮮仏教」（1930年）をはじめとする韓国の学者は、日本仏教界が提示した仏教進化的発想を借りて、仏教は印度—中国—朝鮮にという発展過程をたどり、分派主義を超えた「通仏教」が朝鮮仏教に至って完成したと強調し、その到達点が元暁であると主張するに至った。本章ではその過程が詳細に論じられている。

第4章「戦時護国仏教期の「救国僧像」」では、1930年代後半の戦時期以降、日韓仏教界における護国仏教論の高潮の中で元暁が「護国僧」として描き出されたことが考察される。すなわち、李光洙の小説『元暁大師』（1941年）、元暁の児名「誓幢」を新羅軍職として理解した日本学者の論稿、元暁の『金光明経疏』に注目した江田俊雄の「元暁と護国経典」（1935年）、金泰洽の「高僧逸話元暁大師」（1940年）などから、元暁が軍職にあった人物、「花郎」として把握されたこと、さらにその傾向が1960—70年代の韓国軍事政権期にも盛んであったことが指摘される。

第5章「総本山建立期における「曹溪宗の宗祖像」」では、1930年代後半以後、韓国仏教界における総本山建立運動の推進にともなって、元暁を「曹溪宗の理念的宗祖」とする論稿がとり上げられる。すなわち、総督府が制定した「禅教両宗」の宗名の改定を試みた韓国仏教界は、1930年代中期から統合宗団建設を進めた結果、1941年、曹溪宗の建立に至った。その過程で韓国仏教の宗祖・宗旨・宗名をめぐる議論が起こり、その中から「元暁を曹溪宗の理念的宗祖」とする主張が現れる。そこには、朝鮮仏教を禅一辺倒として偏って認識する傾向を憂慮し、禅と教を併せた会通的和諍論を立てた元暁への注目が存在していたという。

第6章「「和諍」概念の再認識」では、元暁思想の結晶とされる「和諍」概念が、近代韓国においてどのように再解釈されたかについて検討される。元暁の著書に見える「和諍」の用例と特徴は「諸經典の表面上に現れた異なる説を疎通させること」であったが、近代になるとこの「和諍」概念は仏教界を超え、現実向けの論理として適用されるようになり、

元暁が強調した多様性の認定と疎通よりも、一つの志向点に向かう統一や和解の意味で理解されるようになったことが明らかにされる。これにともない、元暁も統合主義者として描き出されたという。とりわけ「元暁宗師の十門和諍論研究」(1937年)を発表した趙明基は元暁の「和諍」から「総和思想」という概念を作り出したが、この用語は1945年以降、国民総和、民族団結と結びつけられて政治的スローガンとしても用いられたという。

第7章「通仏教」認識の変化」では、第3章での考察を踏まえ、「通仏教」が韓国仏教界を代表する用語として定着する過程が究明される。1945年以後も崔南善の「元暁、通仏教の建設者」という発言は、韓国学界において盛んに提唱された。まず、1960年代、韓国思想の原型と法脈が模索された際、朴鍾鴻、李箕永らの学者は、僧朗、円測、元暁、義湘、道説、義天、知訥など歴史上の高僧の思想には「通仏教」の統合・会通的要素が共通して備わっていると主張した。また、宗団分裂、南北分断の解決理念、「平和と統一」の同義語としても「通仏教」が用いられた。さらに元暁の『起信論疏』の思想も通仏教と結びつけられ、元暁思想を代表する他の用語である「帰一心」が「通仏教」と混用されたとして、「通仏教」概念の幅広い使用が跡づけられる。

第8章「元暁論に対する省察」では、近代日本と韓国の仏教界における元暁認識の違いが比較される。すなわち、近代日本の仏教界においては、華嚴五祖から離れたかたちでの元暁の叙述、華嚴以外の浄土・唯識からの研究など、主に教学的側面から元暁を論じており、当時の韓国仏教徒の間に盛行した元暁の英雄化現象は見えない。一方、韓国の仏教史においては義湘の華嚴系弟子が主流をなしてきたが、近代においては元暁の破戒と民衆布教の社会参与的側面が強調されたという。また、入唐した義湘よりも、中国の影響を受けない元暁の華嚴を韓国独自の華嚴正宗として高く評価するナショナリズムがあること、このようにして作られた元暁像は1945年以後も国家、社会、学界の情勢に応じて再生、流布、拡散され、韓国仏教の一基調になっているとし、その問題点についても指摘している。

論文審査結果の要旨

孫知慧氏の論文は、近代における元暁論を日韓の文化交渉の視点から豊富な資料を用いて究明した研究である。重要な成果としては以下の三点があげられる。

第一に、近代の元暁表象化に関する包括的な研究となっていることである。すなわち民族意識高調期、仏教界革新期、日韓仏教思潮交流期、さらには戦時護国仏教期、総本山建立期といった時期ごとに、元暁がその時々時代の背景や民族的要請によってどのように評価され、表象化されたかを解明しているのであり、単に「元暁研究史」たるにとどまらず、「文化事象としての元暁論」というべきレベルに達している。これはまた、韓国近現代仏教史の様相と課題を照射する重要な意義をもつものといえる。

第二に、近代における日韓仏教の交渉を、元暁に関する論説を中心として明らかにした点である。このことは第2章と第3章に顕著であり、元暁をめぐる当時の日韓の論説はほぼ網羅されたといえよう。そして、それらの資料にもとづき、日本で村上専精、高田道見らの「通仏教論」が流行していたこと、韓国人留学生が日本においてさまざまな関連活動

を行い論説を発表したこと、日本の学界に刺激と示唆を受けた鄭晄震、崔南善、趙明基らの研究・論説が現れること、ついで韓国独自の元暁表象が盛んに打ち出されていくという、その過程を本論文は初めて明らかにしたといえる。

第三に、「和諍」「通仏教」概念の解析とその使用法の考察がある。これらは元暁の思想の核心とされた概念であり、第6章と第7章、および第8章に詳しく検討されている。これらの概念がもともと学術的にいかなる意味をもっていたのかを明らかにするとともに、近現代の韓国において、それが政治的スローガンとして利用されていくプロセスを鮮明に描き出している。

このように、本論文は特色ある内容をもっているが、課題ももちろんある。たとえば、現象面の解明に重点が置かれ、思想面の分析がややおろそかになっていること、日本近代における親鸞や道元ら鎌倉新仏教の表象化と比較するならば日韓の共通点と相違点がより明確になったのではないか、と思われる点である。

しかし、そうしたことは今後取り組むべき事柄であり、本論文は元暁論を通して見た近代日韓仏教文化交渉史としてすぐれた内容をもっているといえる。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。